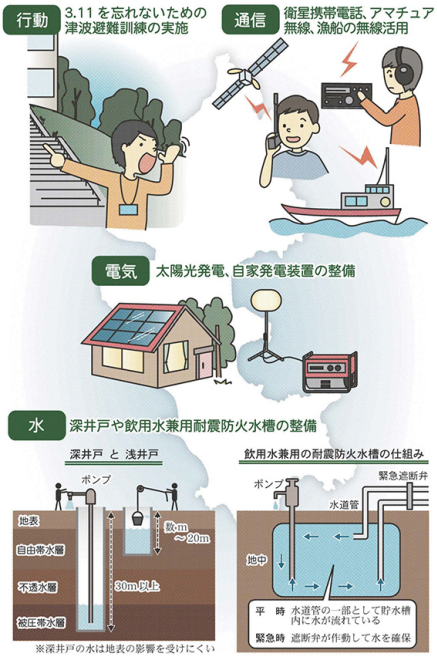
いのちと地域を守る

島内で完結する防災・減災島づくり



※深井戸の水は地表の影響を受けにくい

減災・復興支援機構理事長　木村拓郎さん

水対策 井戸の復活有効

東日本大震災で大島は電気や水道の供給が途絶え孤立した。島内だけで1週間は持ちこたえられる自己完結型の「防災・減災島づくり」を提案した。

「飲料水兼用の耐震防火水槽」も勧めた。普段は水道の一部として使い、災害時は水道から切り離して貯水槽になる。

震災で水対策は、井戸の復活が有効だった。地震でも影響を受けない深井戸を掘ったり、雨水をためる水槽を準備したりする手助けもする。

大震災は広域に及ぶ大災害だ。毎年3月11日は防災訓練を実施するなど、備えを忘れないための工夫をしてもらいたい。

水は生活のあらゆる場面で必要になる。複数の手段を用意すべきだ。

通信に関しては衛星携帯電話やアマチュア無線帯電話、漁業無線も役立つ。停電すると、夜間のお年寄りの介護は大変だ。地区で太陽光発電や自家発電装置を導入し、非常時に電気自給できる態勢を整えてほしい。

「いかに早く消火するか」が火事の時の大原則だが、人口減少や高齢化が進む大島では初期消火が年々難しくなる。

住民総出の消火活動は、将来の防災を考える道しるべになった。住民みんなで備えることが、どんな災害でも一人一人の命、財産を守ることにつながるはずだ。

■むすび塾に参加して――気仙沼市・大島

【避難の様子】津波が来ると思い、実家に行って体が不自由な母親を車に乗せて、逃げた。財布や重要書類は置いてある場所を覚えていたのですぐに持ち出せた。津波到達まで時間がなかったから良かったが、もっと早かったら犠牲者は増えていただろう。

＝自治会長・三浦弘さん（71）

【避難の様子】地震が収まった後、いったん海の様子を見に行った。潮位が下がっていたが、津波が来てもそれほど大きくならないのではないかと思った。

＝三浦明さん（69）

【参加して】島で一人暮らし。震災の時は井戸がある近所の家から水をもらってしのいだ。普段からの近所付き合いが大事だと思う。今回参加して、お互いが助け合う大切さをあらためて痛感した。お年寄りの避難について島民が話し合う必要性も感じた。

＝小野寺捷也さん（69）

【震災の教訓】避難所では地域の人と助け合った。知った顔ばかりで心強かった。いつ次の大震が起きても、すぐに逃げることを徹底したい。

＝小野寺よし子さん（73）

■むすび塾に参加して――気仙沼市・大島

【避難の様子】カキ養殖の仕事を手伝っていた時に地震が起きた。海上のいかだにいたが、普通の揺れではなかったので急いで陸に上がり、車で自宅に向かった。自宅に到着後はすぐに避難した。

＝村上和子さん（60）

【参加してみんなの話が参考になった。震災時に水の確保に困った経験から、ポリタンクやペットボトル20本に備蓄している。おコメも買い置きを増やした。貴重品や非常用品を入れた袋も用意したので、いざという時にはすぐに持ち出せる。

＝駒井真理子さん（63）

【震災の教訓】津波が共同利用の井戸に入ってしまい、一時的に使えなくなった。約1カ月後の大規模余震では、井戸が出なくなったり、水が濁ったりしたと聞いた。

＝村上千代子さん（63）

【避難の様子】気仙沼市街地側の職場で被災した。津波が来るかどうかわからなかったが、会社の避難訓練通りに車や貴重品をそのままにして逃げた。会社の仲間と一緒だったから避難したが、島の家に一人でいる状況だったらどう判断しただろうか。

＝小野寺京子さん（58）

【震災の教訓】地区で4台ある非常用のトランシーバーを持って逃げたが、他の3人が持ち出しておらず使えなかった。停電で冷蔵庫が使えなくなったため、水をくれた島を夜間に外に出して凍らせ、それを庫内に入れて冷やした。

＝村上亮一さん（70）

住民総出の消火 範示す

元気仙沼・本吉広域消防本部消防長
菊田清一さん

■地域から

大島で火災が発生した際の消火活動は、市内から船で応援に駆け付けるまで20～30分かかる。気仙沼消防署大島出張所の隊員7人で消火活動を完結するのが前提だった。

ただ、大きな火災になると人手が足りない。震災翌日に発生した大規模な山林火災の時、住民みんなで延焼を食い止めたことは称賛に値する。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は「むすび塾」を開いている。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

第7回「むすび塾」は23日、石巻市の石巻みづほ幼稚園でやります。